山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第53号（2022. 3）

定番文学教材指導の方向性に関する一考察

－「羅生門」を中心に－

坂東　智子

A Study on the Direction of Teaching standard literary materials:
Focusing on “Rashomon”

BANDO Tomoko
（Received December 15, 2021）

キーワード：教師教育、高校国語、学習指導要領の改訂、定番文学教材、教材分析法、指導目標、指導法

はじめに

平成30年告示の高等学校学習指導要領では、国語科の科目構成が再編された。共通必履修科目として「現代の国語」及び「言語文化」（各２単位）を、選択科目として「論理国語」、「文学国語」、「国語表現」、「古典探究」（各４単位）が新設された。共通必履修科目の「現代の国語」は「実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を育成する科目として」、一方「言語文化」は「上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目として」、目標及び内容の整合性を図ったと指導要領解説に明記されている。

今回の改訂について大滝（2018）は、「『文学の軽視』というメッセージを受け取ってしまい批判意識を抱いた教師や識者もいるようである。選択科目として『文学国語』が選択しにくく、数多くの学校では、『論理国語』と『古典探究』の２科目しか選択されないだろうという憶測に支えられた批判である。共通必履修科目『言語文化』においては、文学的な文章も教材として取り扱えるため、選択科目に焦点が当たることには違和感もあるが、とにかく文学をどの科目でも取り扱いたいということらしい。」と述べる[1)]。筆者自身も含め国語の教師の多くは文学好きであり、「実社会に役立つ国語」と「文学を授業で読む」ことを天秤に掛け、どちらかにより重きを置くという発想をする教師は少ないのではないだろうか。しかし、極論を言えば、文学教材ありきではなく、「文学は実社会で役に立つ国語ではないのか、文学を授業で読む意味とは何か？」という本質に関わる問いを持ち、学習指導を構想し実践する貴重な機会だと捉え直すこともできるのではないか。

2021年３月の教科書検定では、第一学習社が申請し合格した「現代の国語」の教科書１点（「高等学校　現代の国語」）に、５つの小説が掲載されており物議をかもしたという報道もあった。朝日新聞によると、「今回の問題の背景には、評論や新聞記事、法令文などを教材に実社会で役に立つ国語を学ばせたい新学習指導要領の狙いと、小説などの文学も重視したい教員側の意向とのズレがある。」[2)]という。５つの小説とは、芥川龍之介「羅生門」、原田マハ「砂に埋もれたル・コルビュジエ」、夏目漱石「夢十夜」、村上春樹「鏡」、志賀直哉「城の崎にて」である。本稿で取り上げる「羅生門」も含まれている。一方、「言語文化」の教科書は９社１７教科書が合格し、筆者の調査によれば、「羅生門」はそのうち１６教科書に採録されている。採録のなかった１教科書は「高等学校　言語文化」（第一学習社）である。これは、前述の５小説を掲載した「高等学校　現代の国語」（第一学習社）と対になる教科書である。つまり、「羅生門」は令和４年度使用の共通必履修科目「現代の国語」もしくは「言語文化」のいずれかの教科書全てに採録され続け、今回の改訂でも生き残った定番中の「定番教材」である。

そこで、本稿では、「実社会に役立つ国語をまなばせたい」時代においても定番教材であり続ける「羅生門」の教材価値を再考し、これからの指導の方向性を探っていきたい。

１．教科書のなかの「羅生門」

本章では、先行研究を基に「羅生門」が「定番教材」となった経緯を明らかにした後、これまでに指摘されてきた「羅生門」の教材としての価値を整理する。さらに、これからの「羅生門」指導の方向性を、令和４年度使用の共通必履修科目「現代の国語」「言語文化」の教科書編修趣意書を基に整理する。

１－１　教材採録史における定番教材「羅生門」の誕生

「羅生門」は、1915（大正４）年11月号の『帝国文学』に発表され、彼のはじめての短編集である『羅生門』（1917・5、阿弥陀書房）に収録される[3)]。「羅生門」以前にも芥川はいくつかの作品を書いていたがそれらはこの第一短編集には収録されておらず、「羅生門」は彼の処女作に準ずる作品とされ、短編集の表題にもなっているように、「彼の文学の一つの達成を見せている」[4)]と評価された。

「羅生門」が、初めて教科書に教材として登場したのは、1956（昭和31）年発行の明治書院『高等学校総合２』、数研出版『日本現代文学選』、有朋堂『国文現代編』の３冊[5)]である。庄司（2021）に拠れば、同時期に夏目漱石「こころ」や森鷗外「舞姫」も初めて教科書に採用され、それらの作品と共に考察が加えられ、戦後の日本人の精神風景に重ねられた形で論じられた。幸田（2021）はさらに詳細な事情を明らかにしている。３社のうち、当時の必修科目「国語甲」用は明治書院のものだけであり、他はいずれも選択科目「国語乙」用だった。必修用の明治書院版でも高校２年生用に採録されており、今日の定位置である高校１年用に採録したのは翌年発行の三省堂版が初となる[6)]。

その後、すぐに「羅生門」が定番化したかというと、そうではない。

幸田（2021）は、1956年の初めての採録から約50年に及ぶ「羅生門」の採録状況を調査し、今日のような「定番」に至るまでの経緯を３段階に分けて整理した。表１は、幸田の著作をもとに筆者が一覧にしたものである。

表１　「羅生門」定番化のプロセスとその背景

	第一段階（採録率 40%）	第二段階（採録率 83%）	第三段階（採録率 100%）
年代	1973（昭和 48）	1982（昭和 57）	2003（平成 15）
時期	第二次「現代国語」開始時	「国語Ⅰ」開始時	「国語総合」開始時
科目編成の変更等の背景	昭和 45 年版学習指導要領の改訂を受けての全面改訂。新版発行で教材が大幅に入れ替わる。		
時代背景	進学率の急上昇によって高校は多様化する。	高校は実質的に全入時代を迎える。	少子化。高校入学人口が頭打ちを迎える。
「羅生門」の採録状況	前年までは３社に過ぎなかったがここで採録数が倍増する。	人気教材となっていた「羅生門」がほとんどの教科書に採録される。次第に「安定教材」「国民教材」呼ばれるようになる。ただ、僅かな期間でも「羅生門」から別の芥川作品に、あるいは現代小説等に差し替える動きも見られた。	多様な高校の存在を意識して作られた教科書でありながら、その（「国語総合」）全種類に「羅生門」が採録され、「定番教材」という用語も使われ始める。
教科書の発行状況	「現代国語」の教科書が同一会社で複数点発行されはじめる。	同一科目教科書の複数点発行も常態化する。	教科書マーケットが縮小。教材ラインナップや配列が横並びとなる同質化が浸透する。

「羅生門」は、1915（大正４）年に発表された後、1956（昭和31）年までの約40年間は国語教科書に採録されることはなかった。

表１の第１段階は、第２次「現代国語」の開始時である。この科目の登場は、文法や語句といった教えることが明確な古文・漢文に比重を置いてきた高校の国語科教師にとって、何を教えればよいのか、指導内容が明確でない教科として批判もあったという。短絡に過ぎるかもしれないが、筆者は、今回の改訂の科目再編成に対する批判とも似通った状況だったのではないかと考えている。「実社会に役立つ国語」を学ばせたいことと、「授業で文学を読む」ことの意味の関係の問い直しが求められているのが今なのではないか。幸田は、「現代の文章をどう授業で扱うか」、「教え方の手順」としての読解指導論と「羅生門」の教科書採録史は関連していると解き明かしている。要するに、「羅生門」は読解指導を行うのに適した教材、「何を教えればよいのか、指導内容が明確な教材」として、採録シェアを拡大したと考えられている。さらには、第１段階は、1960年代から始まる高度経済成長期と、それにともなって1970年代に高校・大学への進学率が上昇し受験戦争が激化することも背景にある。

第２段階は高校全入時代である。「国語Ⅰ」開始時であり、採録率は83％である。「羅生門」の教科書教材としての価値についての詳細は後述するが、「小説の基本的な読み方」の教えやすさ、指導内容が明確な教材であることが、高校１年生用教材としての定位置を獲得するひとつの要因であったことは間違いない。

「羅生門」の採録率が100％となったのは、2003（平成15）年のことである。幸田は第３段階は第２段階の延長上にあるという。定番化の理由については、「個別の教材価値や作品としての優劣といった固有性だけを根拠に定番化の理由を考えるのではなく、定番教材という現象そのものが、社会状況や制度等との関係から、いかにして出現したのかを問わなければならない」と述べている。第３段階の採録率100％は、教科書業界の「市場競争の原理と無縁ではありえず」、少子化や高校入学人口の頭打ち、教科書マーケットの縮小、教材ラインナップや配列が横並びとなる同質性の浸透といった、同質化という経済原理を背景にして誕生したものの名前である」と言うのである。

１－２　令和４年度使用の教科書編集趣意書における「羅生門」の採録状況

平成30年告示の学習指導要領で高等学校国語科の科目構成が再編され、実社会で役に立つ国語を学ばせたいという指導要領の方向性と、「文学も重視したい」という現場の国語教員の意向とが入り交じる状況が生じていることは既に述べた。こうした「文学の軽視」とも「実用性」に重きを置く傾向が顕著だとも言われる現在の高等学校国語科をめぐる状況の中で、新指導要領に基づいて編集された令和４年度使用（令和３年検定済）教科書で「羅生門」はどのように扱われているのだろうか。筆者は、文部科学省HPに公開されている令和４年度使用教科書編集趣意書を基に調査を行った。表２はその結果一覧である。

表２　令和３年検定済「言語文化」における「羅生門」採録状況

発行者の番号・略称　教科書の記号・番号	書名	配置	時間	参考	時間
2 東書 言文 701	新編　言語文化	２小説１〔言語〕	3	〔言語〕翻案作品を原作と読み比べる	2
2 東書 言文 702	精選　言語文化	２小説１	3	〔言語〕翻案作品を原作と読み比べる	1
15 三省堂 言文 703	精選　言語文化	近代以降の文章編 小説一	3	学びを広げる　古典作品の典拠利用	含む
15 三省堂 言文 704	新　言語文化	物語の展開を把握する		コラム　羅城門には鬼が棲む	

50 大修館 言文 705	言語文化	2 言葉の紡ぐ世界 羅生門		『今昔物語集』	
50 大修館 言文 706	新編　言語文化	4 物語を受け継ぐ 羅生門		参考『今昔物語集』巻第二九第一八 【言語文化の窓】芥川龍之介と「羅生門」（芥川の才筆）	
104 数研 言文 707	言語文化	近代小説（一）羅生門	4	【作者解説】芥川龍之介 【探究の扉】今昔物語集 【ズームアップ】芥川龍之介と古典	含む
104 数研 言文 708	高等学校　言語文化	受け継がれる古文 羅生門	3	【作者解説】芥川龍之介 【探究の扉】今昔物語集 【ズームアップ】芥川龍之介と古典	含む
104 数研 言文 709	新編　言語文化	受け継がれる古典 羅生門	3	【作者解説】芥川龍之介 【探究の扉】今昔物語集	含む
109 文英堂 言文 710	言語文化	羅生門	5	参考　羅城門の上層に登りて…	含む
117 明治 言文 711	精選　言語文化	１近代１　羅生門	2	読み比べ 「羅城門の上層に登りて死人を見る盗人の語」（『今昔物語集』）	含む
143 筑摩 言文 712	言語文化	１４）想像力がひらく世界 ――小説を読む ・羅生門(芥川龍之介)	7	【参考】羅生門の上層に登りて死人を見る盗人の語	含む
第一	高等学校言語文化	×			
183 第一 言文 714	高等学校　精選言語文化	日本文学編―近現代小説（一）羅生門	2	〔文学のしるべ〕映像の中の芥川龍之介	含む
183 第一 言文 715	高等学校　標準言語文化	日本文学編―近現代小説（二）	2	〔文学のしるべ〕映像の中の芥川龍之介	含む
183 第一 言文 716	高等学校　新編言語文化	日本文学編―近現代小説（二）羅生門	2		
212 桐原 言文 717	探究　言語文化	近代以降の文章編 羅生門	5	比較で深める「羅城門の上層に登りて死人を見る盗人のこと」	含む

「言語文化」の教科書は、９社１７教科書が検定合格となった。「羅生門」はそのうち全９教科書会社の１６教科書に採録されている。採録のない教科書は第一学習社の「高等学校　言語文化」1冊である。これは、前述の５小説を掲載した第一学習社の「高等学校　現代の国語」と対になる教科書である。つまり、「羅生門」は令和４年度使用の共通必履修科目「現代の国語」もしくは「言語文化」のいずれかの教科書に採録され続け、「定番教材」としての位置を維持し続けたことがわかる。2003（平成15）年「国語総合」開始時に、「羅生門」は採録率100％となり、高校生に「基本的な小説の読み方」を教える教材として、高校１年生用教科書のはじめの小説単元におかれるという定位置を獲得する。これについては、今回の改訂では扱い方に変更があると筆者は考えている。

１－３　令和４年度使用の教科書編集趣意書における「羅生門」指導の方向性

例えば、東京書籍「新編　言語文化」では、２学期用の教材として配置された。同教科書の１学期の小説教材は「とんかつ」となっている。表３は、「新編　言語文化」現代文編の教材、学習指導要領の指導事項との対応、配当時間の一覧である。

表２から分かるように、多くの教科書が、「羅生門」と典拠となった『今昔物語集』を「読み比べる」形で採録している。しかも、配当時間は２～３時間が多数である。描写や心情の変化を読むことから、「上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める」ことに主眼を置いた教材配置の方向性がみてとれる。これについては、項を改めて詳述する。

表３　「新編　言語文化」現代文編の教材名、指導事項、配当時間数等の一覧

単元	教材名	学習指導要領の内容			頁	配当時数			学期
		知識及び技能	思考力、判断力、表現力等						
			書くこと	読むこと		書	読	計	
現代文編									
１随筆	さくらさくらさくら	(1)ア,イ,ウ,エ		(1)ア,イ	10		2	2	１学期９
	〔言語〕「花」といえば「桜」？	(1)ア		(1)エ/(2)ア	16		1	1	
	「美しい」ということ	(1)ア,イ,ウ,エ		(1)ア,オ	18		1	1	
２小説１	とんかつ	(1)ア,イ,ウ,エ		(1)ア,ウ	24		3	3	
	雨漏りの音〔言語〕	(1)ア,イ,ウ,エ		(1)ア,オ/(2)イ	36		2	2	
	■小説の読み方	(2)カ		(2)イ,ウ	45				
３詩歌	柳あをめる【短歌】	(1)ア,ウ		(1)ア,ウ	50		1	1	２学期11
	■短歌の読み方	(2)カ		(1)イ,ウ	53				
	雪の深さを【俳句】	(1)ア,ウ		(1)ア,ウ	54		1	1	
	■俳句の読み方	(2)カ		(1)イ,ウ	57				
	冬が来た	(1)ア,ウ		(1)ア,ウ	58		1	1	
	少年の日	(1)ア,ウ		(1)ア,エ	60		1	1	
	I was born	(1)ア,ウ		(1)ア,オ	62		1	1	
	〔言語〕歌詞の意味や表現技法について考えよう	(1)ア,ウ		(1)ウ,オ/(2)オ	66		1	1	
	■詩の読み方	(1)ア,ウ		(1)イ,ウ	68				
４小説２	羅生門〔言語〕	(1)ア,イ,ウ,エ		(1)ア,オ/(2)イ	72		3	3	
	〔言語〕元になった古典作品と読み比べよう	(1)ア		(1)エ,オ/(2)ウ	88		2	2	
５小説３	夢十夜	(1)ア,イ,ウ,エ		(1)ア,ウ	94		3	3	３学期５
	■現代文の窓 小説へのいざない	(1)ア/(2)ア		(1)イ,エ	104				
	デューク	(1)ア,イ,ウ,エ		(1)ア,ウ	107		2	2	
	現代文　計						25	25	

（教科書編修趣意書　高等学校　言語文化 を改編した）

現代文編１学期用の教材として、「２小説１」では、「とんかつ」が３時間配当、「雨漏りの音［言語］」と「小説の読み方」で２時間配当となっている。高校１年生に「小説の基本的な読み方」を教える教材としての位置に「とんかつ」が、２学期の典拠となった古典作品と読み比べる教材として「羅生門」が配置されたことは明らかである。

ちなみに、2012（平成24）年検定済の「新編国語総合」（東京書籍）では、現代文編「２小説１　ふれあう心」に「とんかつ」が筆頭教材として掲載され、「５小説２　心の風景」の筆頭教材として「羅生門」が配置されている。「小説の読み方」が同単元にあるのは「羅生門」であった。同教科書の「小説の読み方」の見出しを拾ってみよう。「小説は本当におもしろいのか？」「『作り話』から学べること」「小説の『時』と『場所』」「小説の登場人物」「語り手は誰だ？」となっている。まさに、幸田のいう高校１年生に「小説の基本的な読み方」を教える教材として「羅生門」が掲載されている。同教科書「小説の読み方」からいくつか引用しておきたい[7]。

「『作り話』」から学べること」より

「作り話」というのは、暇つぶしにはなるかもしれないけれど、生きていくうえではなんの役にも立たない、「作り話」からは何も学べないと思う人もいるでしょう。（中略）

そうかといって、恋をしている友人や、家族を亡くした友人にきいてみても、なかなか本当の気持ちを話してはくれないでしょう。人の心は中の見えないブラックボックスなのです。

小説はこのブラックボックスの中をのぞかせてくれます。いわゆる「心理描写」こそ、現実の生活ではありえない、小説だけの特権なのです。小説は「作り話」を通じて、人間のさまざまな気持ちや、考えや、生き方などを、親切に、丁寧に読者に教えてくれます。小説を読んで初めて私たちは、ああ人間はこういう時、こんなふうに考えたり感じたりすることがあるのだと知るのです。

そしてそのことで、私たちは、人の心を理解することができるようになるのです。（後略）

「語り手は誰だ？」

小説には、語り手が存在します。この語り手が誰なのかを把握することも、小説を読む手掛かりになります。

例えば「羅生門」では「作者」が語り手として、風景や事件を語っていきます。「作者」は「下人」の心の中を知っていて、それを説明することができます。そればかりか、「作者」が小説に登場して「下人」について批評を加えているところがでてきます。これは珍しいことですが、この小説の大きな特徴にもなっています。

一方「ほおずきの花束」では、全ては主人公である「夏代」の立場から描かれています。したがって、「夏代」の気持ちは詳しく説明されていますが、「オーノ君」や「綾」や「老人」の気持ちは説明されていません。「夏代」からすれば、彼らの心の中は分からないからです。

こうして比較してみると、同じ小説でもずいぶん作り方が違うということがよく分かると思います。他の教材「とんかつ」や「果物屋のたつ子さん」ではどうなっているか調べてみてください。

こういうことに気づくと、小説というものがいっそうおもしろいものとなり、また読みやすくなるのではないでしょうか。小説は、その読み方によって、思いがけず、その世界を大きく広げていくのです。

一方、指導要領改訂後の令和３年検定済の「新編　言語文化」（東京書籍）では、「とんかつ」と同じ単元に「小説の読み方」が置かれ、「羅生門」と同単元に「元になった古典作品と比べよう」が置かれている。

平成24年検定済の「新編国語総合」の「小説の読み方」と令和３年検定済の「新編　言語文化」に掲載される「小説の読み方」がどう変わるのか、同じなのかは今の段階では分からないが、見出しとしては、大きな変化はないのではないかと筆者は考えている。「作り物語」を読む意味は、時代が変化しても変わらない普遍的なものであろうし、現代の小説であれ近代の小説であれ、源氏物語などの古典作品であれ、翻訳小説であれ、変わらないものだというのが筆者の基本的な考えである。「小説の『時』と『場所』」「小説の登場人物」「語り手は誰だ？」は、どんなところに着目して読めば、小説の世界が広がり深まるか、「読み方」を示したものである。それを、「登場人物」「時」「場所」といった学習用語や分析用語で解説するのではなく、読み物として、やさしく分かりやすい文章で示している。教科書に掲載された複数の小説の特徴を比較して、同じ小説でも作り方が違うということに気付かせ、これから小説を読む時の「読み方」を、例えばひとりで読む時にでも転移できる汎用性のあるものとして、メタ的に捉え直し学習者に提示しているといえる。

今回の「新編　言語文化」の現代文編「特に意を用いた点や特色」（後掲表４）では、「とんかつ」は、「登場人物の会話や行動の描写を通じて、親子の情愛、人と人との触れ合いを感じることができる小説」とされ、高校１年生の学習者に理解しやすいテーマであり、「会話や行動の描写」に着目しながら読むという、「小説の読み方」を学ぶに適した教材として用いられていることがわかる。一方、「羅生門」は、「極限状態にある人間が、正義と悪の間を揺れ動く様子を通じて、正義とは何か、勇気とは何かについて考える小説」として用意されている。「とんかつ」の方が、学習者の日常生活に近く、「親子の情愛」といったテーマも「羅生門」の「正義と悪の間を揺れ動く様子」というものよりも、親しみやすいということが第一の理由ではないだろうか。

他の教科書と比べて「新編　言語文化」（東書）は、「小説１～３」の配当時間をそれぞれ５時間として

おり、描写や心理、心情の変化を丁寧に読み解く方向性が示されている。平成24年検定済「新編国語総合」の「羅生門」には、典拠となった『今昔物語集』「羅城門の上層に登りて死人を見る盗人のこと」は掲載されていない。今回は、掲載される。ここが、「上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目として」の必履修科目「言語文化」の科目特性を反映しての、掲載の仕方の変化と捉えることができる。

表４　「新編　言語文化」現代文編「特に意を用いた点や特色」

図書の構成・内容		特に意を用いた点や特色	該当箇所
現代文編	１　随筆	・桜に対する日本人とヨーロッパの人の感性の違いを通じて、日本人にとって桜が格別な存在であることを述べる随筆を用意しました。（第５号）	→10～15 ページ
	２　小説１	・登場人物の会話や行動の描写を通じて、親子の情愛、人と人との心の触れ合いを感じとることができる小説を用意しました。（第１号）	→24～35 ページ
	３　詩歌	・近現代の代表的歌人・俳人の作品など、伝統的な定型詩を理解し、味わうことができる教材を用意しました。（第１号）（第５号） ・「冬が来た」「I was born」など高校生の情操を培うのにふさわしい詩を用意しました。（第１号）	→50～52 ページ 54～56 ページ →58～65 ページ
	４　小説２	・極限状態にある人間が、正義と悪の間を揺れ動く様子を通じて、正義とは何か、勇気とは何かについて考える小説を用意しました。（第３号）	→72～87 ページ
	５　小説３	・愛情を注いできたペットを亡くし、深い悲しみに暮れていた主人公が、突然現れた不思議な少年と一日を過ごすことで癒され、悲しみを克服する小説を用意しました。（第１号）	→107～116 ページ

（教科書編修趣意書　高等学校　言語文化 を改編した）

１－４　令和４年度使用の教科書編集趣意書における「羅生門」の指導の方向性

それでは、新「新編　言語文化」に掲載される「とんかつ」と「羅生門」の学習指導要領に対応した指導事項はどのように設定されているのだろうか。２作品ではあるが、具体的に見ておく。

表５　「とんかつ」と「羅生門」の学習指導要領の内容

教材	知識及び技能	思考力　判断力　表現力等　　読むこと
とんかつ	（１）　言葉の特徴や使い方に関する事項 ア　言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解する。（言葉の働き） イ　常用漢字の読みになれ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使うこと。（漢字） ウ　我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。（語彙） エ　文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解すること。（文や文章）	（１）　読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア　文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。（構造と内容の把握） ウ　文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。（精査・解釈）
羅生門	（１）　言葉の特徴や使い方に関する事項 ア　言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解する。（言葉の働き） イ　常用漢字の読みになれ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使うこと。（漢字） ウ　我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。（語彙） エ　文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解すること。（文や文章）	（１）　読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア　文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。（構造と内容の把握） オ　作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化についての自分の考えをもつこと。（考えの形成） （２）　言語活動例 イ　作品の内容や形式について、批評したり討論したりする活動。

元になった古典作品と読み比べよう	（1）　言葉の特徴や使い方に関する事項 ア　言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解する。（言葉の働き）	（1）　読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。 エ　作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。（精査・解釈） オ　作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化についての自分の考えをもつこと。（考えの形成） （2）　言語活動例 ウ　異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動。

「とんかつ」と「羅生門」の知識及び技能の指導事項は同じである。「読むこと」については、「とんかつ」が「構造と内容の把握」（ア）、「精査・解釈」（ウ）の２つの事項と対照させて、「登場人物の会話や行動の描写を通して」という基本的な小説の読み方を学ぶ教材として掲載している。一方、「羅生門」の「読むこと」では、「構造と内容の把握」（ア）は「とんかつ」と同じ、「精査・解釈」ではなく、「考えの形成」（オ）を指導事項と対照させている。これまでの「羅生門」の「基本的な小説の読み方」を教える教材としての掲載ではなく、「作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方を深め」、「我が国の言語文化についての」自分の考えをもつ、ということを指導目標としていることは、「羅生門」の今後の指導の方向性に関わる大きな変化だといえよう。さらに、「元になった古典作品と読み比べよう」では、「読むこと」の「精査・解釈」（オ）を取り上げ、「作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深める」ことを目標にあげている。歴史や文化的背景を踏まえ、作品の解釈を深める方向性も新傾向の指導といえよう。「言語活動例」では、読み比べ、比較することにより、「論じ」たり、「批評」したりする活動が例示されている。読み比べるという活動を通して、作品に対する学習者自身の感じ方、見方、評価を言語化するという方向性が打ち出されている。

２．教科書の外の「羅生門」

本章では、いくつかの代表的な先行文学研究や、日本近代文学館の展示会などで紹介された近代文学の代表的な短編小説としての「羅生門」の読みや資料について、教科書の外の資料を基に、「羅生門」指導の方向性を探っていく。

２－１　「羅生門」指導の方向性　―教科書の外の資料を基に―

小説教材の採録については、「物語内容や世界観を把握する必要があるため全編掲載が原則」であること、「小説の候補を考える場合、なるべく削除部分を作らないように」全文掲載することが望ましいと考えられている。「羅生門」は、400字詰め原稿用紙で約16枚という短編であり、その点からも採録しやすい作品であるといえよう。これまでに、「羅生門」の教材価値、指導の方向性については、多く論じられてきた。

庄司（2021）は、高校１年生の小説読解の基本的な力を養うという観点から「羅生門」の教材としての価値として共有されていることを４点に整理している[8)]。

① 完成された、結構度の高い、面白い筋を持つ小説
② ストーリー展開が容易で、人物も少なく、それぞれの心情や関係性を把握しやすい
③ 生徒の興味と関心をひくテーマの今日性
④ 古典を素材としていて、後に続く古典教育につながる

幸田（2021）は、次のように述べる[9)]。

「羅生門」は短編小説として適度な分量で、登場人物も少なく場面展開もシンプルでありながらメリハリがある。下人の葛藤と、自らの悪事を正当化する老婆との対決が読みどころで、老婆の悪の論理を逆手にとり「黒滔々たる闇」に消えていく下人の「ゆくえ」を考えさせる、というのが長い間、授業展開の王道となっている。

田中実（1996）は、「小説のなかに小説の書き手自身が登場し、それまでの小説のレベルを超えたレベル

を登場させる小説」であり、語り手の特異性を指摘する[10]。

＜語り手＞は一方で「平安朝の下人」と言い、それにふさわしく「申の刻」との時間を先に示しながらも、「何分」という近代の時制で時を計る語り方をしている。ここには二つの異なった時制、二つの暦が＜語り手＞によって表現されている。＜語り手＞は「一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。」と始まる「平安朝の下人」の物語のなかに分け入り、直接「作者」を自称し、自己を顕在化するだけでなく、今まで続けてきたお話を異化するようにフランス語や二重の暦を使うのである。一方で「平安朝の下人」のお話でありながら、同時に＜書き手＞自身の時間である＜近代＞の問題であることを＜読者＞に明示し、二つの時空を同じに語る重層的な小説表現を表出させるべく仕掛けているのである。

清水（2019）は、古典を典拠とした作品は芥川以前にも多数あるが、「空間造形という表現法」、「ことばを造形的に使う技法」を習得し、「冒頭から結末までを、その密度の高い表現でつらぬいている」点が多くの翻案作品との違いであるという[11]。

例えば、右に掲げた「羅生門」の冒頭の文章では、芥川は、門の下に空間を造形している。原話からも、門の下の空間性が読めないわけではないが、彼は、それをはっきりとした形に変え、さらに、原話とは反対に人のいない静寂な空間に作りかえている。素材に自在な加工を施していく作業は意識的であり、いきとどいた計算がされていた。

日本近代文学館では、2017年6月から9月まで、「教科書のなかの文学/教室のそとの文学―芥川龍之介「羅生門」とその時代」という展示会が開催された[12]。

日本近代文学館の使命として、日本の近現代文学の資料の収集・整理・保存・公開のほかに、資料を通して文学の豊かさや面白さを若い人々に伝えていくことがある。近年、高校の教室と日本近代文学館をつなぐ様々な試みを企画し、力を入れて推進してきた。高校の「国語」教科書の小説の定番教材「羅生門」「山月記」「舞姫」「こころ」を取り上げる展示を、毎年夏の間計画した。作品に接する高校生だけでなく、指導に当たられる現場の先生方、教科書を通した思い出をお持ちの多くの文学愛好家の方などにも、新しい作品の読み方につながる資料を紹介することができた。

こうした資料を活用することも、必要であろう。

「羅生門」には「ノート」や「草稿」と呼ばれる作品完成以前の資料が大量に残されています。芥川は、「羅生門」の世界を構築する途上で幾度も構想を練り直し、主人公の設定さえも変え、表現を追求し、何度も書き直していたのです。そのことを示す資料がノートであり、メモであり、草稿と呼ばれる資料群なのです。それらによって、作者の構想段階での迷いや決断、表現上の工夫など、発表された本文からだけではうかがい知ることの叶わない情報を得ることができ、私たち読者の想像も広がってゆくのです。

こうした、先行する近代文学研究の知見に学ぶことや、日本の近現代文学に関する資料を通して文学の豊かさや面白さを、高校生に伝えていくことも、これからの「羅生門」指導の方向性として検討する価値があると筆者は考えている。

３．おわりに

筆者は2005（平成27）年から学部３年生を主な対象とした「国語科教育法Ⅲ」で、小中高の文学的文章教材の系統性を捉えるために、「ごんぎつね」（小４）、「少年の日の思い出」（中１）、「羅生門」（高校）の３作品を取り上げた演習を３回にわたり行っている。2021年度前期の授業では、演習発表の後、「羅生門」に関する論文を紹介し、新たな読みの方向性の提案を紹介した。

紹介した論文は、「『羅生門』という世界観認識」（相沢毅彦）である。「私たちが捉えようとうとしている＜対象＞」とは＜自己によって捉えられた対象＞と《自己によっては捉えられない対象そのもの》という二重化されたものであるということである。（中略）そもそも「羅生門」を含む＜近代小説＞とは「世界観認識」、すなわち私たちにとっての世界の見え方や現れ方、また存在の仕方等が問題とされているのであり、その問題の射程は、＜自己＞の把握の仕方から「神々の闘争」といった事柄にまで及ぶものである。そのため、＜近代小説＞を考えることは、＜現在＞においても極めて差し迫った問題であり、その＜価値＞が

問われ続けなければならないと考える。」と抄録に記している。

老婆と下人の対決場面では、「羅生門」の＜語り手＞は下人と老婆との問題が認識の問題であることを自覚した＜語り手＞として作品のなかに登場する。自分の「認識の枠組み」でしか、相手のことばや事象を理解できない、自分自身のことばでさえもそういった制約を逃れることはできない。そのような認識の落とし穴が至る所にあるということを考える契機として、「羅生門」を読むという指導の方向性もあることを、国語科教員を目指す学生には知ってもらいたいと考えている。このことについては、また稿を改めて論じたい。

参考文献

文部科学省：高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　国語編，東洋館出版社，2019.

文部科学省：教科書編修趣意書　高等学校　現代の国語（2021/12/15閲覧）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/tenji/mext_01376.html

文部科学省：教科書編修趣意書　高等学校　言語文化（2021/12/15閲覧）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/tenji/mext_01377.html

庄司達也：「芥川龍之介『羅生門』」『教科書と近代文学』，秀明大学出版会，12-35，2021.

幸田国広：国語教育は文学をどう扱ってきたのか，大修館書店，134-263，2021.

三角洋一ほか：新編国語総合（平成24年3月5日検定済、2東書 国総301），東京書籍，2013.

田中実：小説の力　新しい作品論のために，大修館書店，1996.

引用文献

１）大滝一登：高校国語新学習指導要領をふまえた授業づくり，明治書院，99，2018.

２）朝日新聞：2021年9月12日朝刊（東京本社），27，2021.

３）清水康次：「羅生門」の世界と芥川文学、大阪大学出版会，13，2019.

４）３）に同じ、14.

５）庄司達也：「芥川龍之介『羅生門』」『教科書と近代文学』，秀明大学出版会，12，2021.

６）幸田国広：国語教育は文学をどう扱ってきたのか，大修館書店，151，2021.

７）三角洋一ほか：「小説の読み方」『新編国語総合』（平成24年3月5日検定済、2東書 国総301），東京書籍，101-104，2013.

８）５）に同じ、30.

９）６）に同じ、150.

10）田中実：「批評する＜語り手＞―芥川龍之介『羅生門』」『小説の力　新しい作品論のために』，大修館書店，33-35，996.

11）３）に同じ、89-91.

12）日本近代文学館編：教科書と近代文学，秀明大学出版会，1-35，2021.